

ちかみ  
千頭 聡さん

日本福祉大学 国際福祉開発学部 教授  
藤前千潟協議会 運営委員長



藤前千潟の保全と活用をはかるための対等な議論や情報交換の場として設置された藤前千潟協議会。誰でも参加できることを特徴とし、時には白熱した議論の飛び交うこの協議会のまとめ役として運営委員長を務めておられるのが千頭聡先生です。

千頭先生は、京都市在住でありながら愛知県の大学で教鞭をとり、国際問題の研究者として世界中を飛び回っておられます。今までに訪れた国々は30カ国を超えるとか。

環境工学や国際福祉開発などの分野に精通し、公平な立場で議論を導く千頭先生は、協議会のスムーズな進行には欠かせない存在です。今回は、そんな千頭先生に、お話を伺いました。

■千頭先生が環境に興味を持たれたきっかけは何ですか？

きっかけは幼少の頃に関わるんですが、小さい頃から山が好きで、父親に連れられてよく山へ行っていました。1960年代の終わりだった中学の頃、当時で言う大幹線林道、今で言うスーパー林道の計画が日本中で起きてきたんですね。僕は生まれ育ちが兵庫県で、ひょうのせん氷ノ山（やぶ兵庫県養父市とやず鳥取県八頭郡若桜町のわかき県境にある山）にもスーパー林道を作る計画が起き上がったんです。でも、その氷ノ山のスーパー林道の計画を知って、「林道を作ると言いながら、全然林道ではないじゃないか、観光道路じゃないか」と思ってスーパー林道のことに興味を持って、いろんな人と勉強会に参加したりということをしていました。それが環境問題に関心を持ったきっかけのひとつかな。

もうひとつは、水俣病ですね。水俣病については中学に入った頃に知って、これについてもおかしいと思った。だから、スーパー林道と水俣病のことを中学生なりに凄く勉強して、それが将来環境のことをしっかり勉強したいなと思った出発点ですね。そういう意味では、中学校の3年くらいには、絶対に将来は環境のことを大学で勉強したいと思っていました。

■千頭先生の趣味について教えてください。

もともと中学のときは山岳部だったんですよ。登山と山スキーをやってきたので、最近でもちよくちよく山に登ったり滑りに行ったりするんです。山はひとつの原点ですね。たとえば、高校の時は3泊4日で屋久島の山を縦走したりね。昔から山に行って山を歩いていると自分自身が変わっていくのが分かるんだよね。山登りはしんどいんだけど、山の雰囲気や溶け込んでいくというのを実感できる。山に登る人は同じようによく言うんだけどね。やっぱりこの感覚だけは絶対忘れたくないな。

登山の他には、ここ20年くらい、農家から農地を借りて京都で畑をやっているんです。農業とはとても言えない、農作業というくらいのもんなんだけど、これはそれなりに取り組んでいますね。今でも自宅で消費する分の三分の一くらいは自給できてるかな。畑は草ぼうぼうだけど結構なんとかなるんですよ。

今は勤務している大学が愛知にあるので、月曜日に愛知に来て金曜日に京都に帰るという生活です。何で京都の家に帰るかかって言ったら畑仕事をしなくちゃいけないから。僕にしてみたら、スーツを着ている今の姿は仮の姿。仕事が忙しくて畑に行けないと「あー、畑に行きたい！」と思うね。

#### ■先生の学生時代について教えてください。

僕が大学に入った時は、日本の中で環境のことをちゃんと勉強できる大学や学部がほとんどなかったんですよ。それでも環境を学べる大学の環境工学科へ入学しました。そして、大学の一年生の時に指導教員に「お前たち、環境のことで飯を食う気か。本気か。もし本気で環境のことで飯を食うつもりなら、世の中をすべて敵に回すぞ。世の中をすべて敵に回す覚悟はあるのか」ってはっきりと言われたんですよ。そういう時代だったんですよ。さらに指導教員には、「世の中を敵にするなら世の中のことをすべて勉強しろ。そうでないと戦えないから。お前たち、環境工学科へ来たからって、何かひとつのことだけをずっと勉強していたら良いと思うな」って散々言われたんです。凄く強烈だったけど、それはまさに今に通じることですね。

それで、大学時代は環境工学科にいても、今で言う環境経済学みたいなこともいっぱいやりました。さらには、「社会というものがどういう風に転がっているのかってことをちゃんと勉強しろ」とも言われていたので、工学部だったけれど工学以外のことも結構大学で勉強させられたな。コンピューターのプログラムを作っているときには、「プログラムの精度を上げることを考えていけば良いんじゃないかって、それを社会でどう生かすかってことをいつも考えろ」、というような思考回路を叩き込まれましたよ。

大学卒業後にシンクタンクで働いていた経験も今やっていることに影響しているかな。昔は民間の会社から大学へ来て教員になる人はあまりいなかったもので、よく理系の大学教員としては変わっているって言われますね。

■国際問題に関心を持たれたきっかけは何ですか？

どちらかというと、国際関係への興味は後から生じたものなんです。僕は大学を卒業してから京都のシンクタンクで10年くらい働いていました。その頃は必ずしも国際問題に関心があったわけじゃないんです。その後、偶然、日本福祉大学の教職に就いた時、僕の周りの同僚の教員が、「ちょっと今度、タイとかラオスに行かないか」って誘ってくれたんです。僕は訳も分からず、「はい、行きます！」と言って手を挙げて。1991年に最初にタイとラオスに行ったかな。それがきっかけで国際問題に関わり出したと思います。そして、それ以来、ラオスには二十数年間通っています。

■ラオスではどんなことをされているのですか？

ラオスでの僕の出発点は、焼畑なんですね。ラオスでは今でも焼畑が凄く行われてます。ラオスでは、森林の再生ということにももちろん興味があったんだけど、焼畑のことにちょっと興味を持って関わってみたいなど。でも、焼畑のことを考えるためには、農業だったり、森林だったり、土地利用やコミュニティの問題、教育の問題も考えないといけなかった。それで、全部の問題が繋がってるということが実感として持てました。だから、単に焼畑のことだけ考えていたらいけないな、と思いました。そして、それがサステイナブル・ディベロップメント（持続可能な開発）みたいなことを考えることにも繋がっているんです。

■初めて藤前干潟について知った時の印象を教えてください。

僕はずっと関西にいたので甲子園浜（兵庫県西宮市）という干潟を知っていて、西宮の市民活動ともお付き合いがありました。藤前干潟を知ったとき、甲子園浜と藤前干潟には凄く共通点があると思ったんですよね。まず、もちろん、大都市にあるということ。とても分かりやすい例で言えば、藤前の干潟を見ようと海岸に立った時に、干潟の向こうには伊勢湾岸道路という高速道路（トリトン（名港西大橋））の橋脚が見える。干潟の向こうに高速道路の橋脚が見えるというのが、まさに甲子園浜とまったく同じ風景だった。そして、名古屋という大都市に囲まれちゃっている中にこういう干潟があることの意味、意義をもっともっと広くみんなが共有しないといけないな、というのを思いました。



藤前干潟の向こうにあるトリトン（名港西大橋）

藤前干潟の保全活動に僕は直接は関わっていないので、僕が言うことじゃないかもしれないけども、藤前干潟の保全運動って、それまでの公害反対闘争とはだいぶ違って、先進的なところがあったと思うんですよね。僕が中学から関わってきたスーパー林道の問題とか水俣病の問題とかのそれまでの反対運動って、「私達は闘ってるんだ！何でみんなはついてこないんだ！」っていうタイプが多かった。でも、藤前干潟の保全の場合には、闘いは闘いなんだけど、「自分たちだけが闘っているんだ！」というのではなくて、埋め立て反対活動の輪をどうすれば広げられるのかっていうことに取り組んだっていうのが、僕にとっては凄くなって思えるんだよね。インターネットのような情報ツールなんかフルに使っていたと思うし。藤前干潟では市民活動として埋め立て反対運動が成功したという意味で素晴らしいなと思いましたね。

■現在は藤前干潟協議会の運営委員長として議長を務められている千頭先生ですが、実際に先生が藤前干潟に関わり始めたのはいつ頃ですか？

藤前干潟の活用構想を環境省が作ったのが平成 12 年（2000 年）頃で、藤前干潟の保全活用の構想を考える委員会のメンバーになってほしい、と僕にお声が掛かったんですよ。それが藤前干潟に本格的に関わってアクションを始めた頃かな。もちろん、市民として、環境を専門とする者として、それまでも藤前干潟の埋め立ての問題には関心を持っていましたけどね。

■藤前干潟協議会の設立が決まったときに思ったことを教えてください。

僕の立場からすれば、藤前干潟の埋め立てが中止されてどういう風に活用していくのかと考えていくときに、藤前干潟にはいろんな利害関係を持ったステークホルダー（利害関係者）がいるから、その人たちが同じテーブルで議論する場が絶対に必要になるなと思った。そうでないと、ある関係者は他の関係者に向かって「あいつらはこう思っているはずだ」って思って反対するし、その逆も然りということになる。こういうことはよくあるんです。そして、それはまさに擦れ違いを生むだけなんですよね。僕は、それまでにもこういう色々なステークホルダーが集まって厳しい議論を交わす話し合いの場には関わってきたんです。



現在の藤前干潟協議会の様子

しかし、藤前干潟の場合は、それぞれの利害関係者同士のもっともっとシビアな問題が

いっぱいあったんです。でも、藤前干潟を保全することは決まったんだから、あとはそれをどう生かしていくか、と考えるときには、大きな視野で見れば全ての当事者が実は同じ方向を向いているはずなんです。でも、「実は私とあなたは同じ方向性なんですよね」ってことを当事者同士ではきつと言えないから、他の誰かが言ってあげないといけない。そういうことを間に立って言う人が必要なんだろうなとは思っただし、間に立つのはしんどい部分もあるけど、僕はこの役割を面白いなというふうに感じたのかな。そういうところで、藤前干潟の保全を応援するのが、僕のできることだと、藤前干潟協議会設立の議論のプロセスの中で強く感じました。

それに、この藤前干潟協議会ってすごく変わってるんですよ。「こんな協議会を見たことがない」って言われたこともあるんですけども。主催者は誰もいなくて、一応僕はまとめ役ではあるけど別に代表者ではないんですよ。更に、藤前干潟協議会は誰でも参加できることになってるんです。それって凄く変わっていて、下手をしたらばらばらになってしまいうんですけど、それぞれの力をうまく利用できたら従来のタイプの協議会よりもずっと力を発揮できる。そこは良い意味で面白いなと思います。今は、事務局の機能は環境省で持ってもらって議事録も書いてもらってますけど、最初は議事録もボランティアで付けていたんですよ。

■協議会の議長をする際に心がけていることや苦労されていることを教えてください。

確かに議論をまとめるのは大変かもしれないけれど、議論をよく聞いていると当事者がお互いに違うことを想定してそれぞれの立場から意見を述べていることって結構あるんですよ。当事者は自分たちの立場をきちっと述べることに意識が向いていて、相手の言ったことの真意には意外と気が付きにくい。そういうのを僕の立場で見ていると、「当事者同士は実は全然違う尺度で言ってるよ」とか、「違うことを想定して言ってるよ」とか、あるいは「分からないことをそれぞれの立場で勝手に想定して言っているよ」ってことが分かる。そして、協議会の議論は僕が結論を付ける訳じゃなくて当事者同士が話し合うものだから、僕が当事者に向かって「あなたが考えてるのはこういう条件下でこういうことを想定していますよね」って言って、ちょっとだけ議論を整理する。こうすると、「そういうことだったら、何とかなるよね」ということになった話は今までにいっぱいある。だから、それが議長というか、僕の役目かなと思います。もちろん、そんなに格好良くいくことばかりじゃないですけどね。もっと厳しい議論の中では「協議会に参加したくない」という話が出たこともある。そういうときに、個別にそれぞれの人と会って話をしたこともありますね。

でも、それぞれの立場から自分の意見を言うというのは大事なんです。別の立場の人から見たら、その意見が極論に見えたとしても、その中には何か気付かされる事柄があるはずだし。だから、極論に対しては、理屈に合わない無茶を言っているわけではなくて、ある立場から見ればこれを主張するのは当然だろうなという風に僕はいつも理解しようと

しているんです。そうして、「この人はどうしてこういう風に主張するのか」っていうところを考えると、「あっ、この人はこういう理由があるからこの意見を主張しないといけないんだな」っていうのが見えてきたりして。そして、協議会では、「それについては、他の人はどう思うの？」という風に、他の立場の人に聞いて取り計らえば、一見極論に見えていることでも、どこかで「落とし所」が見つかると思うんだな。

「落とし所」って「妥協点」とはまた違うんですけど、絶対必要なものなんです。0か100かで喧嘩したら、どちらかが「100で勝った」、「0で負けた」の結果にしかならないけど、世の中は必ずしも勝った、負けた、だけで進むとは限らないし。100でないほうが大きな意味では良いことだってあるわけで。だから、勝ち負けじゃなくて、良い意味での「落とし所」をみんなで探り合う方向になれば良いなどは思っています。それは大変と言えば大変だけど、これからの市民社会ってそうあるべきだと思いますし、そういう方向を作っていくことは面白いことだとも思います。

■千頭先生が感じる藤前干潟の魅力について教えてください。

他の干潟にも言えることなだけどね。干潟に立った時にももちろん目の前に干潟が見えるんだけど、その干潟の下はどんな風になっているんだろうっていう想像が出来るし、空を見上げれば海の向こうから来た渡り鳥も見える。そして、藤前干潟のあれだけしかないスペースが、大きく言えば世界とか地球と繋がっているんだって実感できるんですね。同時に、藤前干潟については、こんな素晴らしい干潟が他の自然とは違って、名古屋という



藤前干潟の上空を飛ぶ鳥

大都会のあの場所にあって、世界への入り口であり出口であることも凄いと思う。そこにあることの意味が伝わってくるのが凄いなって。僕は藤前干潟保全の経緯にある程度関わってきたので、最初から何もせずに今の状態が残っているわけじゃなくて、いろんな人たちがいろんな闘いをして、意見も交わしながら頑張ってきた結果として今があるんだってことを知っていますし、それが感じ取れるのが藤前干潟の魅力だなと思いますね。

たとえば、ストックホルムは街のすぐ行ったところに自然公園があって、みんな良い意味で利用してる。いわゆる、人が遠巻きに見ているだけの大自然も良いんだけど、人がちゃんと意識をして守りながら、生態系サービスという恩恵を享受できている点でストックホルムのその自然公園は素晴らしいなって。

これと同じことが藤前干潟にも言えるんですよ。世界には自然豊かなところが他にもあるんだけど、自然の中で人が生かされているんだと実感できる場所って必ずしも多くな



藤前干潟の活用のひとつである観察会

いんだよね。そういうとき、藤前干潟も含めて日本の自然って凄いと思うんです。藤前干潟については、人が環境を守るために凄く活動していて、それが世界の中で見てもとても特筆すべき点だと思います。守られた自然を生活に近い場所にするっていう素晴らしさに惹かれるね。藤前干潟にはそういう魅力があります。ただ、そういう風に思っただけで藤前干潟に関心を持ってくれる人がもっと増えてくれないと、困りますね。藤前干潟の保全と利用の議論を始めた時から、

藤前干潟は利用しながら守るんだっていう共通意識があって、協議会の最初の頃はそれについて議論したんだけど、それがすごく良かったなと思いますね。

■今後、藤前干潟が担っていくべき機能と責任は何だと思われますか？

藤前干潟に来た人が想像力を駆り立てられるような場所になったら良いと思うんです。想像力というのは、目の前にある藤前干潟を見た時に、「この干潟にはどれくらいの生き物がいるんだろうか」、あるいは「ここは世界のどこと繋がっているんだろうか」という風に想像力や感受性を高められるような、刺激を与えられる場所になったら良いなと思ってます。なので、藤前干潟を案内するときに、「ここにこんな鳥がいる、生き物がいる」と伝えることももちろん大事なんだけど、そういう答えを教えるだけではなくて、その人の持っている感性を研ぎ澄ませるようにさせてあげて、想像力を高めてあげられる働きかけのできる場所になったら、と思います。



藤前干潟の泥



藤前干潟に生息するヤマトシジミ

あとは思うのは、水産業を含めた、生態系サービスの価値という環境経済の話ですね。観光産業は別として、日本の場合は良い自然を経済的にも生かそうという発想があんまりないんですよ。藤前干潟においてはシジミの話なんかもそうだけど、藤前干潟が保全されて残ったからこそ、シジミを獲れる環境が今も残っているわけです。だから、生態系サービスの価値をちょっと実体経済として具体化して、

それをもう一回、藤前干潟の保全活動に戻すというお金の流れみたいなものを作れると凄く良いなと思いますね。

■藤前干潟を取り巻く人や、直接的に関わる人について望むことは何でしょうか？

特に若い人にはたくさん言いたいことがあるんですが、もっと藤前干潟をはじめとして現場に行ってもらいたいなって思うね。僕自身も研究者として現場主義でもあるし、自分自身が学生時代にまさに船に乗ったりして色々な現場で研究していたので。でも、今は環境のことを勉強している学生も現場に足を踏み入れずに二次的な情報だけでもって環境を論じている気がします。藤前干潟に来てちゃんと色々体験してほしいなって凄く思いますね。干潟に足を入れてみて、あの何とも言えない感触で、自分が何を感じ取れるのかってことからまずは勉強してほしいなと思います。



干潟の泥の感触を味わう

藤前干潟に今、直接関わっている人には、もっとお互いの話し合いとか協力をお願いしたいですね。ドイツでは生物と河川と景観の三つの分野の専門家が一緒にきちっと現場で議論しながら何かを作っていくというシステムが凄く定着しているけれど、日本の場合は違う立場の人たちが一緒になって何かをするっていう土壌が少なく、自分たちの立場をきちっと守っていくというところが強いですからね。

■藤前干潟の展望について教えてください。

時々気になるのは、藤前干潟もやっぱり変わってきたってことですね。泥の状態だとか、鳥が減ってきているということとか。それは毎日毎日、現場である干潟を見てきている人が声を上げてくれるから気がつくことで。このように自然の注意信号を感じ取っている人の声をきちんと受け止めないと、10年後の藤前干潟は今と違ってしまいうこともありえるね。藤前干潟の環境は何もせず放置しておいて維持できるという場所ではないような気がします。



干潟に集まる鳥たち

藤前干潟の管理については、協議会とか特定のNPOとか行政だとかの関係者はいるけれ

ど、最終的に責任をはっきりと持っている組織が無いんですよね。やっぱりそれが課題かなと思います。大きなことがなければ、鳥がちょっと減っちゃうくらいで、10年後も今のままの干潟の環境は維持できるかもしれない。けれども、干潟の存在を脅かすような大きなことが起きたときに、じゃあ、今までの協議会なり行政なりの組織が動けるかっていうと、たぶん動けないだろうし、下手をするとまた一から市民が反対運動をしないとイケなくなるかもしれません。協議会もある程度は機能を果たしているけれど、大きな方向性を考えるときに、協議会のように誰でも参加できるような極めて任意の活動だけで支えられるかということ、ちょっと不安になります。

■今後、千頭先生は藤前干潟とどう関わっていかれるおつもりでしょうか？

藤前干潟協議会に長い間携わらせて頂いて、今の役割が決して嫌ではないんだけど、やっぱりどんどん世代交代していかなければならないのは確かだね。だから、10年後の協議会を誰がどうやって進行していくのかっていうことはそろそろ気になっていて。それを探していくのも本来なら僕の仕事なんだろうね。ぼちぼちそれも考えていかないとイケないかなと思っています。

■千頭先生を動かす原動力とは一体何でしょうか？

もちろん、藤前干潟に魅力があるっていうのもある。僕がさらに協議会に携わっているのは、どうやったらいろんな意見を0か100かじゃない形で議論をして方向性を決めていけるのか、というのを学ぶ場になっているからです。僕自身にとって、協議会は凄く気づきの場になっているんです。同時に、僕が何となく思っていることなんです、これからの社会のありかたというのは「やわらかな社会」だと思っているので、その社会を作っていくときに、藤前干潟で僕が経験することは凄く意味があると思う。そういう学びの場である、というのが一つの原因力かもしれませんね。

■「やわらかな社会」というのはどのような社会ですか？

世界を見渡すと、環境問題もそうだし、紛争もそうだし、今の日本を取り巻く状況もそうなんです、だいたいそういう状況のときは勝つか負けるかという方向に向いちゃうのね。でも、勝っても負けても良くならないということがやっぱり多い。でも、多様な価値観の中から何かの一つの大きな流れを作っていける社会というか、みんながそれぞれに主張するけれど全体として見た時に「こうなってほしいよね」という基本の部分は共通で外さずにいける、そんな社会が目指すべき社会だなと思うんだよね。それは「多様性に寛容」ということでももちろんあるんだけど、多様性は下手をしたらばらばらになってしまう。

けれど、多様性が本来持っている強さみたいなものを上手く出せるような社会が、これからの社会じゃないかなと思うんだよね。そういう社会に50年単位くらいで変わっていかれば良いかなと。僕が中学時代に経験したのは「闘う社会」だったけど、たぶんこれからはそういう闘う社会ではないだろうな。こういうことを考える場を、藤前干潟に与えてもらっているなと思うんです。

2014年1月

聞き手：滝藤由貴（名古屋自然保護官事務所自然保護官）

野村朋子（自然保護官補佐）

笹木理沙（インターン生）

千頭聡（ちかみさとし）



昭和30年7月21日、兵庫県宝塚市生まれ、京都市在住。日本福祉大学国際福祉開発学部教授。藤前干潟協議会運営委員長。